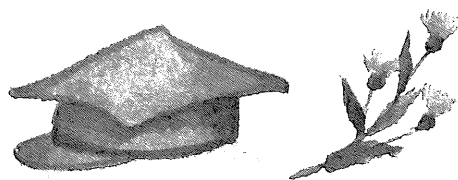


大学入試の歴史 (第2回)

東京工大の入試の歴史



名古屋大学教育学部教授
佐々木 享

東工大の歴史

工業系の単科大学として最も古い歴史を誇る東京工業大学は、今年の5月26日に創立104周年を迎えた。これを記念して最近『東京工業大学百年史』が刊行された。104周年に百年史とは少々奇妙だが、これは刊行が遅れたためである。

東工大の歴史は1881(明治14)年の東京職工学校の創設に始まる。この学校は、明治政府の殖産興業政策のなかで重要な役割をになうべき者すなわち「職工学校ノ師範若クハ職工長製造所長タルヘキ者」を養成する目的で設立された。職工長の養成という目的規定や職工学校という名称は、当初は受験生、学生にうけがよくなかったといわれるが、1890(明治23)年に手島精一を校長に迎えて以来、折からのわが国産業革命に重要な人材を供給する学校として発展し、学校が蔵前にあったところから、「煙突のある所(には、必ず)蔵前(人)あり」といわれる程になった。なお校地は震災後、現在の大岡山に移転した。

学校の名称は1890(明治23)年に東京工業学校に、1901(明治34)年には東京高等工業学校に変わった。校則上の目的規定も変わったが中幹技術者養成をめざす教育水準や修業年限(3年)は

当初から基本的には変わらなかった。学制上変わったのは、当初設けられていた1年制の予科が1886年に廃止されたことくらいのものであった。

大学令(1919)年によって単科大学設立が認められてからは卒業生を中心に大学昇格運動が盛んになったが、この運動は1929(昭和4)年に東京工業大学の設立となって実った。1920年に東京高工機械科を卒業した土光敏夫は、今日では行革の旗手として名を知られているが、昇格運動に最も熱心な1人だったといわれる。ついでいえば、この年機械科を卒業した73名中39名が在学中に1回以上何らかの賞あるいは牌を授与されていたが、土光は何1つ受けなかった1人であった。これは、学校の成績だけで人の将来を卜することはできない証しなのかも知れない。

さまざまな工夫——初期の入試

入学試験は志願者、受験者からみればつねに厳しい選抜試験であり競争試験であったが、東京工大の前身校が東京職工学校(1890年まで)、東京工業学校(1901年まで)と称していた時代の入試には、学校側からみれば優秀な志願者、入学者を集めるための苦労がつきまわっていた。この時期の同校の入試方法はめまぐるしく変わったが、それは、今日のように激化した入試問

題への対応策としてではなく、志願者、入学者を集めるための工夫の積み重ねという意味がふくまれていた。

選抜の基準はいうまでもなく学力水準であったが、中学校がまだ整備普及していなかった1890年代には、学校が要求する学力の水準を学歴によってではなく、その内容を具体的にしめす必要があった。たとえば、1896年までの入学試業（入学試験のこと）の学科目の内容は次のように示されていた。

読書	漢字交り文
作文	漢字交り文
算術	四則、分数、小数、比例、百分算、開平、開立、求積
代数	諸定義、符号、最大公約数、最小公倍数、分数、比例、一元一次方程式、多元一次方程式及其問題、負数ノ解釈、不定不能ノ場合
平面幾何	諸定義、一点ニ於ケル角、平行直線、三角形、平行四辺形、軌跡、平面積
図画	自在画(鉛筆画若クハ毛筆画)、器具及草花等ノ臨本模写、用器画、平面幾何画法及尋常投影法(円筒円錐等ノ複傾斜迄)
物理	大意
無機化学	大意
英語解釈	凡ユニオン第四読本ノ程度ニ依ル

英語のように当時普及していたテキストによって水準を示した場合はその要求水準はほぼ明瞭であるが、読書、作文、物理あるいは無機化学のような記述だけでは水準を推測できない。後述のように尋常中学校卒業者に優先選抜の道を開いていたから、中卒程度ということになっていたと推測される。中学校以外の場で勉強していた者には、当時既に売り出されていた問題集が有力な手がかりを与えていたのであろう。翌1887年から入学試業については科目名のみを掲げ、その程度は「尋常中学校卒業ノ程度ニ依ル」とされるようになった。

第2に、正規の学校教育を受けた者を優先的に入学させようとしていたことが注目される。

たとえば1888(明治21)年の規則は、尋常師範学校卒業者、尋常中学校の卒業者で地方庁推薦の者は無試験で入学させるとしていた。1890年には、府県立尋常中学校卒業者で各科の成績3分の2以上の者は府県知事の証明で無試験で入学させる、と変更された。翌90年にはこの措置は私立尋常中学校にも適用されるようになった。私立尋常中学校の側から抗議あるいは陳情があったのであろう。94年からは、入学定員を一般入試・中卒者各半数に分け、尋常中学校卒業者にも定員超過のときには3科目の学力試験を行うこととされた。尋常中学校が普及してきた結果、中卒者も試験を受けなければならぬ時代になったのである。

さらに1899(明治32)年からは、まず中卒者に英語、数学、物理及化学、図画4科目の試験を実施し、その合格者を入学させてなお欠員がある場合に限り、一般入試を行うものと改訂された。ちなみに、公私立中学校は急速に増加した結果、1899年には166校、同年の卒業生総数は4,175名に達していた(表1)。こうした変化に対応して中卒者優先の方針を掲げたのであったが、実態としてはなお暫くは、一般入試による入学者と中卒の入学者とは半々だったようである。

東京工業学校時代の入試のもう一つの特徴は、今日でいう地方入試が重視されていたことである。

1890(明治23)年からは、生徒募集を道府県

表1 公私立中学校の増加

年	学 校 数			卒 業 生 数		
	公立	私立	計	公立	私立	計
1894	56	16	72	949	355	1,304
1895	70	16	86	1,170	411	1,581
1896	78	21	99	1,394	404	1,798
1897	89	27	116	1,781	677	2,458
1898	105	30	135	2,073	970	3,043
1899	133	33	166	2,758	1,417	4,175

学校数には分校を含んでいない。
毎年の「文部省年報」による。

庁に依頼し入学試験もその便宜の地で行い、東京府下に限って本校が募集と入学試験を行うものとされた。94年からは、地方在住者のための入試は道府県庁ではなく地方の尋常中学校に依頼して行うこととされた。この方式は1904（明治37）年まで続けられた。交通機関としての鉄道がまだ充分発達せず、情報伝達も思うにまかせなかった時期であるから、募集と入試事務を地方庁や地方の中学校に委託する方式は、全国から学生を集める手段としては有効であったに違いない。この方式は、本校の教職員が府県庁や中学校に出張して実施するのではなく、問題用紙を送付し、答案用紙を返送してもらうというものであった。問題の漏洩とか不正などの不祥事が起こりかねないこの方式が11年にわたっ

て実施できたのは、それだけ明治人が謹厳だったということなのであろうか。

学力試験と推薦入学の2本立て

——1906年以後

1903年に専門学校令が施行されたことに対応して、東京高工では、満25歳までという応募資格の上限年齢を撤廃したほか、中卒という正規の学歴をもたないものための学力検査中心のいわゆる一般入試を廃止した。中卒の学歴をもたないもののためには専門学校入学資格検定（いわゆる専検）というより一般的な制度が設けられ、専検の合格者は中学校卒業者と同等に扱われるようになったからである（専検については別の機会に述べる）。

表2 東京高工の入学志願者・入学者（1906～1928）

	無試験検定			試験検定			計
	応募者	入学者	入学者中の比率	応募者	入学者	入学者中の比率	
1906(M39)	130	75	(42.4)	869	102	(57.6)	177
1907(40)	148	79	(39.1)	1,100	123	(60.9)	202
1908(41)	163	102	(43.2)	1,080	134	(56.8)	236
1910(43)	145	79	(36.6)	890	137	(63.4)	216
1911(44)	118	82	(35.7)	949	148	(64.3)	230
1912(45)	110	75	(30.2)	1,108	173	(69.8)	248
1913(T2)	132	93	(38.3)	1,435	150	(61.7)	243
1914(3)	145	82	(37.4)	1,467	137	(62.6)	219
1915(4)	135	72	(35.1)	1,249	133	(64.9)	205
1916(5)	168	87	(38.8)	1,459	137	(61.2)	224
1917(6)	203	82	(34.7)	1,789	154	(65.3)	236
1918(7)	191	85	(37.6)	1,692	141	(62.4)	226
1919(8)	170	74	(33.8)	1,711	145	(66.2)	219
1920(9)	180	63	(32.8)	1,249	129	(67.2)	192
1921(10)	171	54	(27.7)	818	141	(72.3)	195
1924(13)	115	27	(13.2)	674	177	(86.8)	204
1925(14)	117	21	(9.9)	996	192	(90.1)	213
1926(15)				1,359	230		
1927(S2)				1,550	222		
1928(3)				1,695	225		

1909(M42)、1922(T11)、1923(T12)のデータ未詳。
各年の『東京高等工業学校一覧』による。

このほか、東工高校の入試制度は、1906（明治39）年から大きく変わった。すなわち、この年以後の入試は、中卒者に対する試験検定（今日でいう学科試験）と中学校在学中の成績優秀者に対する無試験検定（今日でいう推薦入学）との二本立てで実施されることとなったからである。

試験検定の科目は、後には変わることはあったが、当初は英語、数学、物理及び化学、図画の4科目について中学校卒業程度で実施され、工業学校卒業者にはこのほかに国語が課された。また工業図案科のみの志望者に対しては——この当時、学科選択については第3志望まで認められていた——前記の数学と物理の代わりに図案を画かせる方法もとられた。

無試験検定は、指定する中学校の卒業生で、3学年以上当該校に在学し——当時は転校が多かった——最終学年の成績首位より10分の1以内にある者につき、在学中の成績と面接によって合否を決定する方式であった。無試験検定で採用する人数は定員の半数以内とされていたが、実際にはその合格者が43%を越えたことはなく、次第に低下する傾向にあった（表2）。

東京工高の無試験検定の制度は、1925（大正14）年を最後として撤廃された。

傍系出身者も対等に扱われた東工大入試

東京工業大学は1929（昭和4）年4月1日に発足と決定したので、第1回入試は同年3月15日から実施された。願書提出締切日（2月16日）と試験日は帝大と同じであった。入試は「高等学校高等科理科ノ授業科目中ニ就キ学力選抜試験及身体検査ヲ行フ」ものとされ、第1回入試は表3の科目で実施された。「最初の予想では、工業界不振の現状・新設直後の為に本学の名が衆

表3 東京工業大学の入試科目（1929年）

志 望 学 科	入学試験検定科目
染料化学科、窯業学科 応用化学科、電気化学科	数学、物理、化学、 外国語（英、独語の内1）
紡織学科、機械工学科 電気工学科、建築学科	数学、物理、図画、 外国語（英、独語の内1）

『東京工業大学六十年史』652ページ。

知せられないために入学志願者の僅少を危惧された」が228名の志願者があり、153名が合格となり、147名が入学した（『六十年史』653～655ページ）。

東工大が最初から募集定員150名の1.5倍もの志願者を得たのは、他の帝大工学部と違って応募資格を広く定めていたからであった。即ち、東京帝大工学部などは、高校および学習院の高等科理科の卒業生をもって応募資格の第1順位と定め、この順位の志願者が定員を割った場合にのみ二次募集で第2位以下の学歴者の応募を認めていた。実際には東京、京都などの先帝大では当時既に第1次募集の段階で定員を超える状況になっていたため、第2位（高校文理卒業生）、第3位（専門学校卒業生等）が応募する余地はなくなっていた。これに対して東工大は、第一次募集の段階から、高校高等科卒業生（理科、文科を区別していないが、受験科目からして実態としては理科に限定される）、高等工業卒業生、東京及び大阪両高工の附設工業教員養成所卒業生、大学令による学士、高師卒業生、大学予科修了者（官公私立を問わず）、高工以外の専門学校卒業生、大学予科学力検定の合格者をすべて対等に扱っていたのである。このため、第1回入試の応募者が228名に達したといっても、そのうち高卒者は44名に過ぎず、高等工業卒業生155名、その他の学歴者29名が含まれていたのである。

このような方式は、東工大の入試に種々な特徴と問題をもたらした。

第1に、東京工大の募集方式は、医学部を除くかつての後発帝大と同様な、高卒者を十分に引きつけることができないという悩みの表現でもあった。試験を実施することにしていたためでもあるが、東工大にはその後も長らく、定員数に達するような高卒志願者が集まらなかった。(表4)

表4 東京工業大学の志願者・入学者の学歴

	高校高等科卒	高等工業卒	その他	計
1933	70/ 92	62/153	15/ 46	147/291
1934	70/107	53/144	23/ 66	146/317
1935	80/138	57/187	17/ 80	154/405
1936	67/106	66/179	22/ 95	155/380
1937	76/123	65/176	25/110	166/409

前段が入学者数、後段が志願者数。

東京工業大学「昭和十二年度教務参考書」により作成。

第2に、上述の特徴の反面でもあるが、学歴を問わなかったことにより、広く俊秀を集めることができた。表4にみるように、合格率は高卒者がつねに最も高かったが、毎年、高等工業卒業者やその他の学歴者が高卒者に伍して受験し、合格率が低かったとはいえ高卒者を上まわ

る成績で入学した者が少なくなかった。

第3に、高等工業卒業者をはじめとするいわゆる傍系学歴者にとっては、帝大の門が次第に狭くなっていった時期であっただけに、東工大が広く門戸を開放したことは福音として歓迎された。

第4に、高校側からみると、せっかく進学先として大学が新設されたのに、高卒者優先とせずといわゆる傍系者と一緒に受験させられるという不満があった。この背景には、原内閣の時に策定された高等教育拡充計画はほぼ完成しており(1919年には12校しかなかった高校は29年には32校に達していた)、新設校も卒業生を出すようになっていたという事情があった。1929年には、官立大学としては東京工大だけでなく、大阪工業大学(のちの1933年に大阪帝大に合併される)、東京文理科大学、広島文理大学、熊本医科大学が新設されたのであった。このうち熊本医大は県立からの移管であって学生募集の純増はなく、両文理大は高等師範の上に設立されたという成立のいきさつからしても高等師範卒業者に大きく道を開くのは当然と考えられていた。大阪工大も入試については東工大とほぼ

同じ方式をとった。こうして、官立大学が一挙に5大学も増設されたのに、その恩恵は高卒者には必ずしも均霑しなかったわけである。

表5 高校高等科卒業生数

年	官立高校	公立高校	私立高校	計
1922(T11)	2904 (25)			2904 (25)
1923(12)	3316 (25)			3316 (25)
1924(13)	3795 (25)			3795 (25)
1925(14)	3795 (25)			3795 (25)
1926(15)	4270 (25)		43 (4)	4313 (29)
1927(S 2)	4645 (25)	58 (2)	60 (4)	4763 (31)
1928(3)	4883 (25)	58 (2)	92 (4)	5033 (31)
1929(4)	4874 (25)	73 (3)	209 (4)	5156 (32)
1930(5)	4842 (25)	210 (3)	233 (4)	5285 (32)
1931(6)	4735 (25)	256 (3)	264 (4)	5255 (32)
1932(7)	4616 (25)	396 (3)	326 (4)	5338 (32)
1933(8)	4783 (25)	376 (3)	316 (4)	5475 (32)
1934(9)	4745 (25)	430 (3)	333 (4)	5508 (32)

()内は学校数。毎年の「文部省年報」による。